

博士課程修了者の キャリア意識形成に関するアンケート調査



若 者

奥 井 隆 雄*

The study of post graduate mind for their career development
Key Words : PhD. Student, Postdoc, innovation, career development
Diversity of career path

はじめに :

現在、イノベーションの担い手として、博士人材に対して大きな期待がもたれており、大学や公的研究機関などでの学術的研究の進展に寄与するだけでなく、産業界など社会の多様な場で活躍することが望まれている。

工学系においては、博士課程修了後の就職者に占める大学教員やポストドクターなどのアカデミックポストを選んだ人の割合は、平成元年の56%から平成17年の47%へと減少する一方で、産業界を選んだ人の割合は、29%から38%へ増加しており¹⁾、キャリアパスは多様化する方向へ向かっている。しかし、産業界からは博士人材は能力の個人差が大きいといわれており²⁾、博士課程に対する評価は必ずしもよいとはいえない状況にある。

また、アカデミックポストを選択する場合には、一度、ポストドクターを経験することが普通になっている。しかし、ポストドクター任期修了後のキャリアパスが不透明であるといわれており、多様な活躍の機会が与えられていないと考えられている。

これまでさまざまな学会において、博士人材のキャリアパスに関するシンポジウムが開かれ、この問

題に対する関心は大いに広がり、議論も深まってきている。また、文部科学省によりポストドクターのキャリアパス多様化に向けた組織的支援と環境整備を行う取組みを支援する「科学技術関係人材のキャリアパス多様化事業」が実施されており、博士人材のキャリア支援に関する経験が積み上げられてきている。

今後、さらに博士人材のキャリアパスについての議論を深めていくためには、博士人材がどのような環境下で自らのキャリアを考え、どのようなきっかけで職業選択をおこなっているのかを知ることが重要であると考えている。

そのため、今春、私は博士課程修了者および2007年度修了予定者を対象として図1に示すアンケートを実施した³⁾。その結果、博士人材のキャリアパス形成には、周囲の博士課程の先輩たちの就職動向が大きく影響していることがわかってきた。

ここでは、アンケート結果を示すことで、今後の博士人材のキャリア支援のあり方について議論の種を提示したい。

- ① キャリア形成に関する環境
 - 1-1 博士課程時代の研究テーマが、修了後の博士課程修了後の進路選択に関する認識に対する影響
 - 1-2 博士課程時代の研究テーマが博士課程の先輩からの知見への博士課程修了後の進路に対する影響
 - 1-3 博士課程時代の研究テーマが企業活動に対する影響
 - 1-4 博士課程時代の研究テーマが産業界の研究開発に対する影響
- ② さまざまな職業への関心の幅・方向（博士課程時代に関心をもった仕事）
- ③ 博士課程修了後の就職先
 - 3-1 博士課程修了後に就いた仕事
 - 3-2 博士課程修了後に就いた仕事での業務内容（研究内容）に対する認識
- ④ 職業選択の方向性の決定と就職活動のための時期
 - 4-1 博士課程時代の就職活動で希望していた就職先
 - 4-2 博士課程時代の就職活動で希望していた業務内容（研究内容）
 - 4-3 博士課程時代の就職活動で希望していた研究テーマ
- ⑤ 職業選択の方向性に対する「きっかけ」
 - 5-1 就職先への満足度（博士課程への満足度）
 - 5-2 博士課程修了後に就いた仕事に対する満足度
 - 5-3 博士課程に進出したことに対する満足度

図1 博士課程修了者のキャリア形成に関する意識調査アンケート項目



*Takao OKUI

1976年1月生
大阪大学大学院工学研究科電子情報エネルギー工学専攻博士課程後期修了
(2004年)
現在、セントラル硝子株式会社松阪工場硝子加工部アンテナ開発グループ「博士の生き方」主宰 博士(工学) 人材育成、大学院教育、アンテナ工学
TEL : 090-2068-7441
E-mail : triso@mvd.biglobe.ne.jp

博士課程での環境が博士人材の職業選択に与える影響：

アンケートは、「博士の生き方」(<http://hakasenoikikata.com/>)ウェブサイト上にアンケートフォームを掲示して、回答を募った。アンケート実施期間は2008年2月25日～2008年3月12日とした。回答者数は422名で、専門別の内訳は、理工系395名、人文社会科学系27名であった。また、博士課程修了直後の就職先別の内訳は、大学教員、ポストドクターなどのアカデミックポストに就いた人は277名、企業に就職した人が81名であった。

博士課程修了直後にアカデミックポストに就いた人と企業に就職した人に分けて集計した結果、次の傾向が見られた。

アカデミックポストに就いた場合も、企業に就職した場合も、彼らの周囲の博士人材の進路はアカデミックポストの場合も企業の場合もあると回答した割合が60%を超えていた。

修士課程時代の同期の進路は、大企業の研究職・技術職が多かったと回答している人が、いずれの就職先を選んだ場合も60%を超えていた。

博士課程時代に関心を持っていた仕事としては、「研究職・技術職」がいずれの就職先を選んだ場合も90%を占めていた。アカデミックポストに就いた人の場合は、「大学教授職」も60%と高い割合を示していた。

就職活動時に希望していた業務内容としては、いずれの就職先を選んだ場合も博士課程時代の研究テーマとマッチしているか近い分野を希望している割合が高かった。企業に就職した人の場合は、さらに、「研究活動を通じて身につけた思考様式・行動様式を活かせる仕事」も視野に入れている割合も50%と高かった。また、希望就職先について、アカデミックポストと企業の両方を視野に入れていた人が全回答者の20%を占めていた。

就職活動時に希望していた就職先、業務内容を決めるときかけとしては、「周囲の博士課程の先輩たちの就職活動について見たり話を聞いたりしていたこと」を挙げる人がアカデミックポストに就いた人で60%、企業就職した人で

45%ともしっかり高い割合を示していた。また、企業就職した人の場合には、修士課程時代の同期の就職先を参考にした人が30%、企業に勤める知人からのアドバイスを受けたという人が20%程度いた。

いずれの就職先を選んだ場合も、博士課程に進んだことについて満足と回答した割合、博士課程修了後の仕事に対して満足と回答した割合は、それぞれ80%、70%であった。ただし、博士課程に進んだことには満足しながらも、その後についたポストドクターとしての処遇には、不満があると回答した方々もいた。

以上のことから、博士課程の学生の大半は研究職・技術職か、大学教授職への関心をもっているといえる。そして、具体的に就職活動を行うときには、博士課程時代の先輩たちの就職動向もしくは修士課程時代の同期の進路から自分の就職可能な範囲を捉え、その中から自分の希望に沿った仕事を選択するか、もしくはその範囲の中に自分の希望を合わせようとするのではないかと考えられる。

また、企業就職者の場合に、希望業務内容として博士課程時代の専門性に必ずしもこだわらない人の割合が高い理由としては、企業が専門にこだわらない人を求めていると一般的に認識されているためだと考えられる。

博士課程修了者が後輩を気にかける環境づくりが重要：

アンケート結果から、博士課程の学生の職業選択には、彼らの周囲の博士課程の先輩たちの就職活動経験が関係している場合が多いことがわかった。このことは、学生が、自分たちと近い位置にいる人物の経験であれば受け入れやすいことを示しているといえる。

ただ、現状では多くの学生が先輩たちから得ている情報は、いつ就職活動を始めるのか、どのようところに就職することが可能なのかといった就職するまでの情報に留まっているように思われる。

学生が自らのキャリアパスを考える場合、就職す

るまでだけでなく、就職後も含めて考えていくことがより望ましいと考えられる。そのきっかけづくりとして、大学を修了し企業や大学・研究機関で働いている博士人材が、後輩たちと接することのできる機会を設けていくことが有効なのではないかと考えている。

例えば、研究室で定期的に修了者も交えて飲み会などの集いを開くのもよいと思うし、修了者が企業のリクルーターとして訪問してきたら快く迎え入れて学生と談話してもらうようにするのもよいことではないかと考えている。また、専攻単位で、修了者を招いて仕事やかかわっている研究などについて話してもらうのもよいかもしれない。

学生たちは、先輩たちと接することにより、かつて自分と同じ経験をしてきた先輩たちがどのような仕事をしており、所属組織から何を期待され、何を考えて生活をしているのかを知ることになり、自分自身の将来についてより深く考えることができるようになるのではないだろうか。

アンケート結果から回答者の80%は博士課程に進学したことに満足しており、学生が先輩たちと接することは、大学院での研究活動にとってもよい刺激を与えるものになるのではないかと考えている。

最後に：

博士人材のキャリアパスについて議論をしていくにあたっては、彼らがイノベーションの担い手となるための環境についても考察をしていく必要があると考えている。そのためには、博士人材のキャリア形成に関する意識がどのような社会的・文化的な背景(関連する業界のあり方、学界と産業界の関わり具合、研究分野の成熟度など)に由来しているのかを個別の研究分野について調査をする必要があると考えている。今回の調査結果を足がかりにして、今後より考察を深めていきたいと考えている。

- 1) 文部科学省 平成元年度、平成17年度 学校基本調査報告書(高等教育機関編)
- 2) 日本経済団体連合会・提言「イノベーション創出を担う理工系博士の育成と活用を目指して」
<http://www.keidanren.or.jp/japanese/policy/2007/020.html> (2007)
- 3) 奥井 日本化学会第88回春季年会, 3PC-015 (2008)

アンケート結果の詳細については、「博士の生き方」第4回アンケート調査(<http://hakasenoikikata.com/question04co.html>)に掲載している。

